

9月です。令和元年度の秋を迎えましたが、世界ではアメリカと中国の貿易摩擦により関税の報復合戦が行われ、その影響からか日本の円高、株安の状況(8月6日)を迎えています。この先どうなるのかはわかりませんが、世界の貿易にとってよろしくないように思われます。

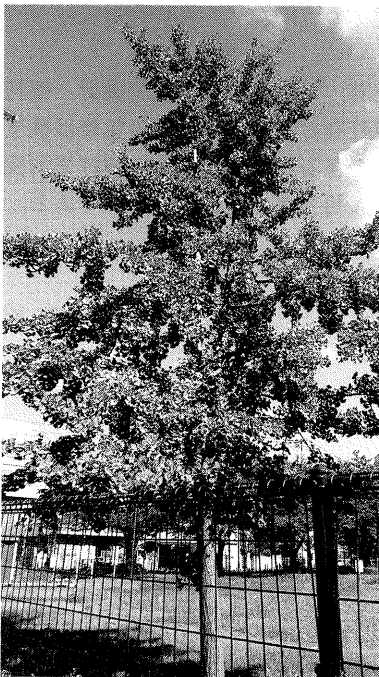
秋というと実りの秋です。米などの穀物のほか、梨などの果物も収穫の季節を迎えます。ちょっとマイナーなというか酒の肴にもなる食べ物の銀杏もこの時期です。赤煉瓦酒造工場の隣の旧醸造試験所跡地公園にはイチヨウが1本あり、銀杏の実がついています。イチヨウは雌雄異株ということですので、この木は雌株です。また、受粉には雄株が必要ですが、駅近くの王子神社にはイチヨウがあり銀杏も実っていますから、そこから花粉が風にのってくるのかもしれない。今年は気候のせいなのか、実の大きさはすでに2cmを超える位(8月7日)になっています。この様子だと例年より早く大きな銀杏が実りそうです。炒って食べれば、緑の実と塩気の風味がたまりません。ただし、食べすぎは健康に良くないとのこと。

さて、協会では、この夏培養タンクの通気装置の改修を行いました。3基のタンクでの酵母の培養には空気の供給が必要ですが、これまで3基同時の空気供給量の能力がやや足りなかったのを改善しました。同時にタンク培養室の床面のタイルを剥がしコンクリートできれいにしました。試験培養も良好で、今秋から培養に寄与します。

国税庁では、毎年「清酒の製造状況等について」を公表しており、今年3月には29BY分が出されました。それを見ると、清酒の実製造場は1,202場です。製造方法別の製造場数は、純米酒1,023場、純米吟醸酒1,094場、吟醸酒867場、本醸造酒787場、一般酒839場となっており、一般酒を製造しない製造場が30%あることがわかります。数量の面からみると、一般酒が全体の58.1%を占めていますが、25BYと比べその製造数量シェアは7.1%も低下しています。増えたのは純米酒、純米吟醸酒です。

原料米の精米歩合のデータでは、全体の平均精米歩合は63.5%で25BYに比べ2.7%低くなっています。これは、一般酒のシェアの低下、純米吟醸酒の精米歩合の低下によるものようです。一般酒の精米歩合は73.8%で25BYより0.5%低下していますが、ほぼ同じです。原料用アルコールの使用数量は白米1トン当たり147.3Lで25BYに比べトン当たり22.5L減っています。これも純米吟醸酒等の製造数量の伸びによる影響と思われる。一般酒のみの原料アルコール使用量は白米1トン当たり284.2Lで、25BYの278.2Lと比べ少しの増加にとどまっています。従って、一般酒の製造内容は25BYと比較してほぼ同様の製造となっているように思われます。一般酒のカス歩合を比較してみても、25BYの20.9%に対し29BYは20.9%と同じでした。詳しいことは、国税庁HPの「お酒に関する情報」の「統計情報・各種資料」内の「その他」のところに公表されています。

日本醸造協会の定時評議員会、理事会は毎年6月に開催されます。今年も6月13日に一ツ橋の如水会館で開催されました。議案は前年度の事業報告、決算書報告の審議ですが、今年は、4年に1度の評議員の選任報告、理事・監事の選任が行われました。結果として、新しい常務理事として下飯 仁氏が7月1日から就任されています。下飯常務は酵母研究の専門家でもあります。どうぞ、よろしくお願いたします。



旧醸造試験所跡地公園のイチヨウ  
(8月6日撮影)